

2 研究の実際

(1) 「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方に関する理論研究

「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方は、心理学の分野で用いられています。心理学者ヘンリー・クラウドは「境界線は私たちを定義します。何が私であり、何が私ではないのか、その範囲を明確にします」⁽¹⁾と述べています。また、「自分自身に限界を設定することは必要で、自分にはどれだけのエネルギーと時間があるのかを認識し、それに従って仕事量を調節する必要があるのです。自分にできることは何か、いつそれができるのかを考え、それ以上のことには『ノー』と言いましょう」⁽²⁾と述べており、自分という領域の認識と自己分析の必要性を説いています。

この考え方が、特別支援教育に応用された例として、白松は「そもそも自己を変容させることは、強制されることでは生じにくい。自己を分析し、よりよくしようとする『自律的』な資質能力を養うための指導の視点として『がんばればできること』と『がんばってもできないこと』を切り分ける『バウンダリーワーク（境界線引き）』があり、児童生徒の困り感を解消する上で、非常に有益である」⁽³⁾と述べています。

(2) 本研究における「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を生かした活動

上記における「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を踏まえ、本研究においては、学級活動(2)の学習過程において自分に合った目標を設定するための手立てとして活用します。

リチャード・H・モリタは「『自分自身を知る』という、自己認識への試みこそ「本当の目標」を見つけるための第1ステップである」⁽⁴⁾と述べています。児童一人一人の目標設定においても、生活上の課題に照らし合わせた今の自分を見つめることが必要だと考えました。また、安部恭子は「目標を立てて、生活することにより、現在の生活をよりよくすることの大切さを理解したり、学級での話合いを通して、友達の意見などを参考にしながら、自己のよさや実現できそうな目標を具体的に考えて『意思決定』したりすることができるようにすることが大切である」⁽⁵⁾と述べており、実現可能な目標を考えるには、自分が今できていることを認識できていることが必要だと考えました。したがって学級の話合いの中で出された解決方法を「今できていること」「もう少しがんばればできること」「かなりがんばればできること」の3つに整理することで自己認識を促し、自分に合った目標を設定することができると考えました。さらに、ワークシートにそれらを書くことで「よりよい自分」を目指す道筋を「見える化」することができると考えました。児童は、ワークシートに課題に照らし合わせ上記の3つについて自己分析して整理をします（資料1）。ここまでの活動が「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を生かした活動です。ステージ1の目標は、児童がワークシート中に記入した「もう少しがんばればできること」です。その目標が達成できた場合は、「かなりがんばればできること」をステージ2の目標として取り組むように促します。

ステージ1

「かなりがんばればできること」の記入欄

「もう少しがんばればできること」の記入欄

「今できていること」の記入欄

資料1 ワークシートへの児童の記入例

(3) 学級活動(2)における目標の捉え方

学級活動(2)の授業は、児童が自ら努力目標を決定し、その実現に取り組めるよう生徒指導の機能を生かす展開を工夫することを通して、自己指導能力を育てることを目指しています。また、『楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動小学校編』(国立教育政策研究所)には、『やらされていることには本気で取り組まない』『願わないことは叶わない』『内省のないところに成長はない』ことを踏まえ、自分たちで目標をしっかり定め、反省と改善を繰り返しながら追求できるようにすることで集団も個人もよりよく成長する。学級で話し合い、これを基に各自が自分の目標を決めて、集団として協力し、個人として努力しながら前向きに取り組めるようにすることは、児童の大きな成長につながる⁽⁶⁾と示されています。つまり、「なりたい自分」と向き合い、自分に足りないものを考え、目標を設定し改善していく経験が必要であり、かつ目標に対する意識を高め、自分の実態に合う目標設定の必要性に気付かなければ実践にはつながらないと考えます。

(4) 目標に関する意識の変容

実態把握と意識の変容を探るため、児童の目標に関するアンケート調査を行いました(図1)。児童の意識の傾向をつかむために、調査項目を「自覚度」「実践度」「実現度」「リレーション度」の4つのカテゴリーに分けて、実践前と実践後の意識の変容を見取ることになりました。「自覚度」は、自分が目標をどのように受け止めているかについて、「実践度」は、目標を立てることと立てた後の実践について、「実現度」は、目標に向かって取り組んでいる達成度について、そして「リレーション度」は、周囲の友達と共に頑張っていこうとする意識についての項目です。数値化に当たっては、アンケート項目の回答数をカテゴリー毎に合計し、全児童数に対する割合をグラフに表しています。以下に各カテゴリーの設問を示します。

トップページのおすすめコンテンツ【参考資料】から、ダウンロードできます。

【自覚度】

- ① 学級の目標を全部覚えている。
- ③ 新年や学期、夏休みなどの初めに立てる目標は真剣に考えている。
- ④ 目標があることは大事なことだと思う。
- ⑤ 目標を立てるとき、今の課題や自分の欠点をよく考えて決める。
- ⑦ 目標を立てるのは、正直「面倒だな」と思う。

【実践度】

- ② 学級の目標を達成するために、毎日頑張っている。
- ⑧ 自分に合った目標を立てることができる。
- ⑨ 目標を立てたら、自分で気を付けながら頑張ることができる。
- ⑩ 目標を立てても、何が目標かを忘れてしまうことがある。

【実現度】

- ⑫ 自分の目標を達成して嬉しかったことがある。
- ⑬ 自分のクラスは、みんなで目標に向かって頑張っていると思う。

【リレーション度】

- ⑥ 目標を立てるとき、友達に相談したいと思う。
- ⑪ 目標に向かって頑張っている友達のを応援したことがある。
- ⑭ 自分のクラスでは、友達同士で目標達成のために励まし合っていると思う。
- ⑮ クラスみんなで、目標に対する頑張りをよく振り返っている。

ありのままの自分に近い答えに○をしてください。		4	3	2	1
		多い(4)	多い(3)	多い(2)	多い(1)
①	学級の目標を 全部覚えている。	4	3	2	1
②	学級の目標を達成するために、毎日がんばっている。	4	3	2	1
③	新年、1学期、夏休み、2学期など、初めに立てる目標は真剣に考えている。	4	3	2	1
④	目標があることは、大事なことだと思う。	4	3	2	1
⑤	目標を立てるとき、自分に足りない所、できている所をよく考えて決める。	4	3	2	1
⑥	目標を立てるとき、友達に相談したいと思う。	4	3	2	1
⑦	目標を立てるのは、正直「めんどうだな」と思う。	4	3	2	1
⑧	自分に合った目標を立てることができる。	4	3	2	1
⑨	目標を立てたら、自分で気を付けてがんばることができる。	4	3	2	1
⑩	目標を立てても、何が目標かを忘れてしまうことがある。	4	3	2	1
⑪	友達の目標に向かってがんばっている姿を おうえんしたことがある。	4	3	2	1
⑫	自分の目標を達成して(がんばることができて)うれしかったことがある。	4	3	2	1
⑬	自分のクラスは、みんなで目標に向かってがんばっていると思う。	4	3	2	1
⑭	自分のクラスでは、友達同士で目標達成のために励まし合っていると思う。	4	3	2	1
⑮	クラスみんなで、目標に対するがんばりを よく振り返っている。	4	3	2	1

図1
目標(めあて)についてのアンケート(事前)

(5) 授業実践**ア 題材名**

GO! 5-0組 パワーアップ大作戦!! 「あいさつは、心をつなぐリボン」

イ 本時のねらい

気持ちのよい挨拶ができるように、自分の実態に合った目標を考え、自己決定をすることができる。

ウ 事前アンケート（対象児童：28名）

挨拶について事前にアンケートを実施しました。結果は、表1のとおりです。設問⑦の回答を見ると、挨拶は必要なことだと十分に理解していることが分かります。また、設問④⑤を見ると、必要だという認識の高さに対して実践は十分できていないことがうかがえました。この認識の高さと実践の達成度の低さの差に着目し、問題意識を持たせようと考えました。

表1 挨拶に関する事前アンケート結果

⑦	あいさつをすることは、生活の中で「必要だな」と思いますか？ とても思う 22人 少し思う 6人 あまり思わない 0人 全く思わない 0人
④	相手からあいさつをされて、うれしかったことはありますか？ はい 26人 いいえ 2人
⑤	ズバリ、「あいさつ」が得意である。 はい 15人 いいえ 13人
⑥	朝学校に来て、友達に「おはよう」とあいさつをしていますか？ <u>いつもしている 11人</u> 時々している 10人 あまりしない 6人 全くしない 1人
④	学校のろうかななどで先生や友達とすれちがうときや、教室に入ってくる先生たちに自分からあいさつをしていますか？ <u>いつもしている 13人</u> 時々している 11人 あまりしない 2人 全くしない 2人
⑦	「あいさつしてよかったな」「あいさつすると気持ちいいな」と思ったことはありますか？ はい 21人 <u>いいえ 7人</u>

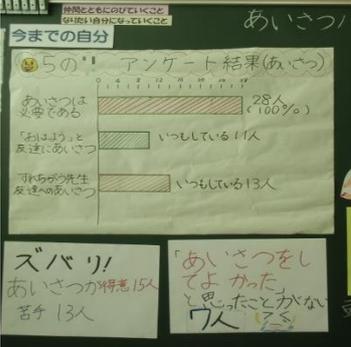
エ 調査隊の活動

アンケート結果を基に、児童の視点で「どんな問題点があるのか」「どこに着目して実践すべきか」などを話し合い、学級全体に報告・提案する「調査隊」を結成しました。学級の生活上の問題を教師から投げ掛けるだけでなく、学級の仲間からの報告・提案という形で知ること、学級全体の問題意識を高めようと考えました。昼休みに希望者が集まって、アンケートの結果をグラフに表したり、みんなが一番伝えたいことは何かを考えたりしながら、原稿を作成しました（資料2）。教師は、アドバイザーとして一緒に活動をしました。調査隊の児童の1人が設問⑦の結果に着目し、「クラスの4分の1の人が『あいさつしてよかった』と覚えてないということだよ」と発言しました。そこで、「してよかった」と思える挨拶を自分たちが互いにやっていく必要性も伝えるべきだということになりました。教師が予想をしていた以上に、自分たちの問題として前向きに取り組む姿が見られました。



資料2 原稿を作成する調査隊

オ 授業の様子

	学習活動 手立て (◆)	教師の働き掛け 研究の視点に関わる教師の働き
<p>導入 (つかむ・さぐる)</p>	<p>1 前時までを振り返る。</p> <p>2 調査隊からの報告で、アンケートの結果と気持ちをクラス全体で共有する。</p> <p>◆自分たちの問題だと認識できるように、電子黒板で調査隊からの報告動画を流した。</p>  	<div style="border: 2px dashed blue; padding: 10px; margin-bottom: 10px;"> <p>みんなが書いた振り返りは、全て精一杯頑張ったからこそ書けるもの、次につながる良い振り返りでした。中でも、もう一度基本に立ち返って、大事にしたい言葉がAさんの振り返りの中にあっただけ紹介しますね。Aさん、お願いします。</p> </div> <p>C:「難しい目標にしたので、今度はもっと考えて自分に合う目標を立てようと思う」と書きました(抽出児A)。</p> <p>T: 調査隊のみんなは、何が問題だと伝えたかったのかな。</p> <p>C: 挨拶は、必要だと全員思っているのに、いつもしている人は、半分もいないことです。</p> <p>C:「挨拶をしてよかった」とお互いに思えることです。</p> <p>T: もったいないことだね。どうして思っているもできないでいるんだろう。</p> <p>C: 恥ずかしいからです。</p> <p>C: 返してくれないと嫌だから。</p> <p>C: 声をどのくらい出せばいいかわからないから困ります。</p> <p>T: 道徳の授業で登場した愛ちゃんのことを思い出してみようか。始めから、挨拶ができる女の子だったかな。</p> <p>C: いや、始めはできなかった。</p> <p>C: 急いでいたらできない。</p> <p>C: するタイミングがよく分からない。</p> <p>C: 知らない人にするのは、ちょっとこわいと思います。</p> <p>T: なるほど、しようと思ってもできない理由がこんなふうになり越えられない壁になっていて、「いつもできる!」とはならないんだね。</p> <p>C: でも、難しさはいろいろあるけど、するしかないと思います。</p> <p>T: そうだね。〇〇さんのやる気、すばらしいなあ。壁を乗り越えられそうだね。</p> <div style="border: 1px solid blue; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>挨拶をするときの難しさを児童の発言をカードにして積み上げ、必要だと分かっているけど、なかなか乗り越えられない壁のように示し、課題を「見える化」しました。</p> </div>

3 本時のめあてを知る。

今の自分よりも、あいさつがパワーアップするために、自分に合った目標を決めよう。

展開
(見付ける)

4 挨拶ができるようになるために取り組めばよいことを話し合う。
◆「いつ」「どこで」「誰に」「どんなふうに」という視点で解決策を考えさせた。(2人→全体)

いつ	どこで	だれに	どのように
朝	教室	仲しの友達	聞こえるように
昼休み	階段	友達 先生(他担任)	笑顔で自分 そ気よくから
授業始 まり	机下	他の学年	えいよくしなう
帰りの 挨拶	くつ箱	親しい先生	とまてあいさつ
休みの 時	外		相手の目を見て
毎日	室内		気むよく

T:どんな挨拶ができるようになりたいか、考える材料集めをしよう。みんなのワークシートの「今、できていること」のところを見ると、「朝」「教室」「仲良しの友達」「聞こえるように」などが挙がっていたよ。他にもありそうだよね。
ただし、お願いします。もちろん家でもどこでも挨拶をパワーアップさせてほしいです。だけど今回は、お互いに頑張りが見えるようにするために、学校生活の中での挨拶の目標を決めるので、学校の中の「いつ」「どこで」「だれに」「どのように」を考えてください。



2人で考えてメモをしている様子 全体の場で発表する様子

児童が発表した内容を表に整理し、何をどのように頑張ればよいかを「見える化」することで、自分が「今できていること」をどのように具体的にパワーアップさせるか考えることを促します。

終末
(決める)

5 バウンダリーワークを行う。

かなりがんばればできマス

もう少しがんばれば、できマス

今、できマス

T:では、今から仮の目標を書きます。表に書いてある言葉を組み合わせたり、自分で付け加えたりして考えましょう。
T:仮の目標が書けたら、バウンダリーワークをします。「もう少しがんばればできること」「かなりがんばればできること」を書きましょう。

○この時間の始めに紹介したAさんの振り返りを覚えているかな。難しすぎる目標にしてしまったことを悔やんでいたよね。自分に合った目標にするためにもっと考えなければいけない、と。
みんなも是非、今の自分をパワーアップさせるために、まずは「もう少しがんばればできること」をしっかり考えてみよう。



<p>終末 (決める)</p>	<p>6 目標設定についてペアで話し合う。</p> <p>◆互いに聞き合い、良いと思ったら、OKとサインをさせることで、書いたことに自信を持たせ、目標に前向きに取り組もうとする意欲につなげた。</p> <p>◆ワークシートにも「2人でタイム」の進め方を示すことで児童にとって流れが分かりやすいようにした。</p>	<p>T：では、次にバウンダリーワークの後の「2人でタイム」をします。</p> <div style="border: 2px dashed blue; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>○「今できていること」に書かれていることが、ちゃんとできているなら、お互いにOKを書こうね。そして、「もう少しがんばればできること」が難しすぎたり簡単すぎたりしないかどうか、アドバイスをし合いながら話し合いましょう。その後、目標の決定となります。</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">    </div> <p>OKのサインをもらう様子 アドバイスをし合う様子</p>
<p>7 本時の振り返りをする。</p> <p>◆バウンダリーワークや「2人でタイム」によって、目標が自分に合うものになったという過程が書いている児童を紹介するようにした。</p>	 <p>目標を発表している様子</p>	<p>T：では、自分の目標を誰か教えてくれないかな。それから、その理由もお願いします。</p> <p>C：「必ず毎日、ろう下などですれちがうときに止まって相手の目を見てあいさつをする」を目標にしました。訳は、隣の〇〇さんが、「それがいいんじゃない」と言ってくれたので、自分に合っているんだな、と思ったからです。</p> <p>C：私は「毎日笑顔で相手に聞こえるようにあいさつをする」にしました。〇〇さんからアドバイスをもらったので決めました。</p> <p>T：みんなで話し合っってバウンダリーワークをしたり、「2人でタイム」をしたりしたことで、自分に合った目標が立てられてようだね。挨拶の難しさの壁は、乗り越えられそうかな？</p> <p>C：はい！</p> <p>T：では、気合を見せてもらおうかな。挨拶は、声も大事。「あいさつパワーアップ大作戦」、自分の目標を達成できるように、頑張るぞ！</p> <p>C：オー！！</p>

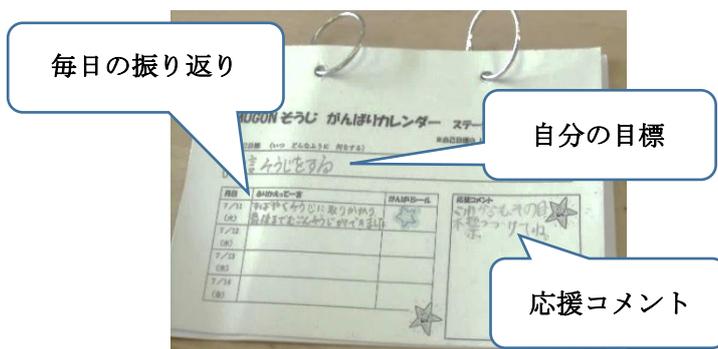
カ 事後指導

(7) がんばりカレンダーによる個人の実践の振り返り

自分の目標に沿って実践する際の日々の振り返りに、ステージ1とステージ2に分けた2枚つりのがんばりカレンダーを使用しました(資料3、4)。それは、より高い目標に向かって挑戦することもできるようにしたいと考えたからです。したがって、児童にとって「もう少しがんばればできること」として設定した始めの目標が、もしステージ1で達成できたならば、ステージ2において「かなりがんばればできること」と思っていたことに挑戦してもよいというルールを設定しました。また、このがんばりカレンダーは、いつも自分の目標を確認できるように、卓上に立てておくことができるようにしました。また、「友達からの応援コメント」を書く欄を設け、目標を忘れていたり、頑張りが足りないときに励ましの言葉をもらったり、よく頑張っているときに称賛の言葉をもらったりすることができるようにしました。



資料3 がんばりカレンダーに記入する児童



資料4 がんばりカレンダー

(4) 実践後に振り返る学級全体の実践の振り返り

自分の目標について10日間取り組んだ後「あいさつパワーアップ大作戦ふりかえりニピック」と題し、振り返り活動(1時間)を行いました。児童は、実践を振り返って、まず、「自分の目標が自分に合っていたかどうか」と「どのくらい実践することができたか」に対する自己評価(金・銀・銅)をしました(資料5)。次に、「友達の実践に対する他者評価(きりり賞)」を行いました。

学級全体で互いの頑張りを称えます。その後、「何が足りなかったか」という視点を持って次につなげることを意識しながら話し合いました。最後に、学級の実践の宝箱に自分のメダルを貼りました(資料6)。この掲示物は個と集団の高まりが見えるもの、ひいては「自分だけで頑張るのではなく、学級の仲間と一緒に伸びていく」ということを実感しながら取り組むための下支えになるものだと考えました。



資料5 自分の実践を振り返り自己評価を書いている児童



資料6 宝箱にメダルを貼っている児童

(6) 授業実践における手立ての有効性についての考察

ア 「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を生かした活動の有効性についての考察

実践Ⅰでは、学級の目標である「5の〇 9か条」において、最も多くの児童が課題だと考えていた「無言で時間いっぱい掃除をすること」をパワーアップさせようと取り組みました。実践Ⅱでは、生活の課題の2番目に児童が挙げた「話を聞くこと」についてのパワーアップに取り組みました。実践Ⅲでは、3番目の課題となっていた挨拶について取り組みました。

児童は授業の終末で、バウンダリーワークをしたことで、自分に合った目標を考えることができたかについて自分を振り返りました。回答は「とてもそう思う」「そう思う」「あまり思わない」「思わない」どれかを選択する形式にしました。「バウンダリーワーク（境界線引き）」の有効性を探る1つの方法として、この回答を分析した結果は表2のとおりです。

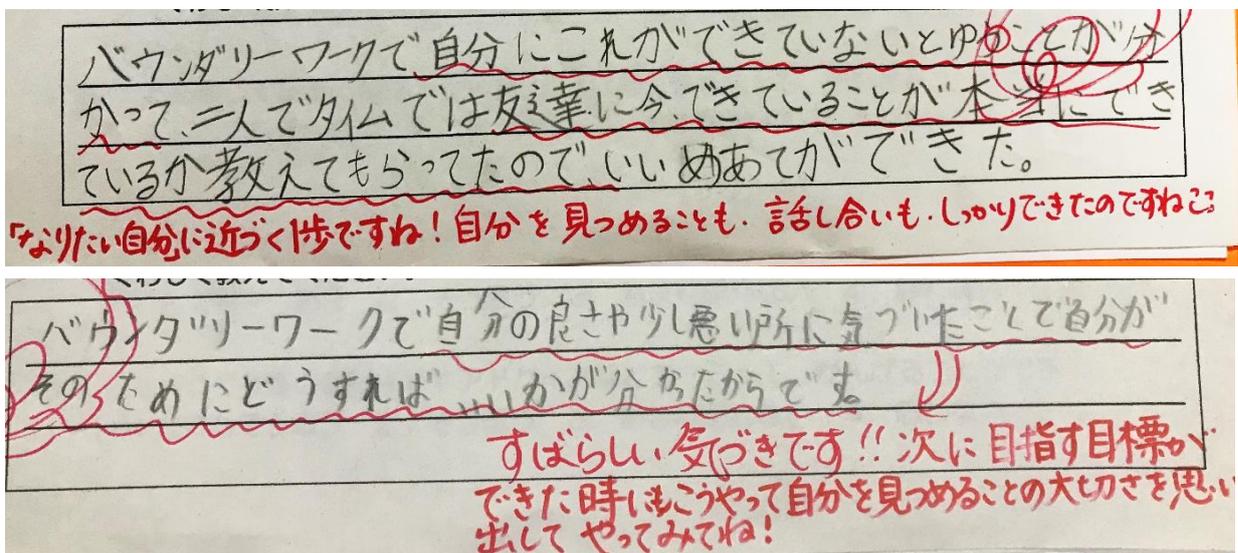
児童全員が「自分に合った目標を考えることができた」と回答していました。実践Ⅰと実践Ⅱを比較すると、「とてもそう思う」と回答した児童が41%から57%と増えており、実践Ⅲにおい

表2 自分に合った目標設定ができたかについて（人数・割合）

回答	実践Ⅰ(29人)	実践Ⅱ(28人)	実践Ⅲ(28人)
とてもそう思う	12人(41%)	16人(57%)	21人(75%)
そう思う	17人(52%)	12人(43%)	7人(25%)
あまり思わない	0人(0%)	0人(0%)	0人(0%)
思わない	0人(0%)	0人(0%)	0人(0%)

では、さらに75%まで増えました。児童は、集団討議で出された解決策の中で、「今できていること」「もう少しがんばればできること」「かなりがんばればできること」について自分なりに整理することができていました。すなわち、この活動は、自分を客観的に見る視点を持ちながら内省し、「今できていること」の自覚を促し「もう少しがんばればできること」を見付けて自己目標として設定する有効な手立てであると考えます。

実践Ⅰ、実践Ⅱ、実践Ⅲと回を追うごとに、より自分に合った目標を設定できていることから、「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を生かした活動を行う経験を重ねることで、より自分に合った目標設定ができるようになると考えられます。また、児童が書いた振り返り（資料7）の中にも、「これができていないということに気付いた」「自分のよさや少し悪いところに気付いたことで、自分がそのためにどうすればいいか分かった」などと、バウンダリーワークによって自分を見つめ、課題に気づき、目標設定につなげる意識を見取ることができました。



資料7 バウンダリーワークと「2人でタイム」を振り返った児童の記述

イ 実践を基にした目標の振り返りにおける有効性

目標に向けて実践した後の自己評価（図 2）では、実践 I と実践 II を比較すると、実践 II では、児童全員が「できた」または「よくできた」と回答しており、「もう少し」と答えた児童はいませんでした。このことから、バウンダリーワークを行い自分に合った目標設定ができるようになることで、実践が充実したものになると考えられます。また、実践 I で思うように実践できなかった 6 人の児童は、実践 II では、バウンダリーワークを行う際に実践 I よりも時間を掛けてじっくり考えている様子が見られました。さらに、実践 III においては、「よくできた」児童の割合が「できた」の割合を上回っています。自分に合った目標設定ができていたことで、目標が十分に達成され、自己評価が高まっていると捉えることができます。1 人の児童が、自己評価で「もう少しだった」と回答した理由として、「自分にとって、難しい目標だったから」と書いていました。このような児童の気付きを基に児童は経験を積みながら、目標設定の力を伸ばしていくことができると考えます。

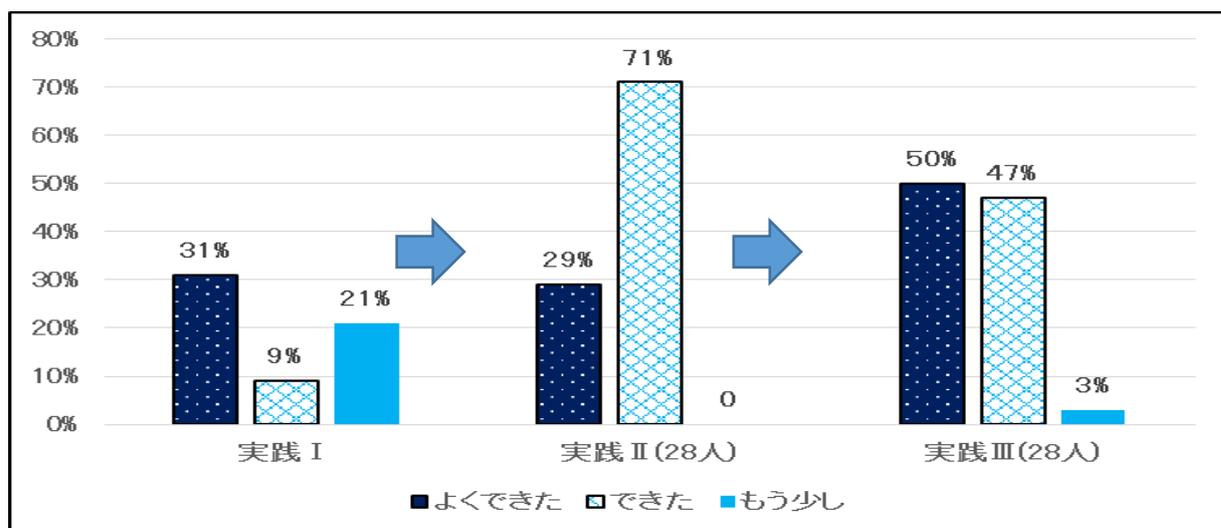


図 2 実践 I、II、IIIにおける自己評価の比較

ウ 目標設定時の回答と実践の関連について

目標設定時のバウンダリーワークで「自分に合った目標を考えることができたか」について、「とてもそう思う」と回答した児童は、その後の実践に対する自己評価が高い傾向にあることが分かります（図 3）。特に顕著に表れているのは、実践 I における実践後の自己評価が C だった児童の 6 人中の 5 人は「自分に合った目標を考えることができた」と思っているものの、「とてもそう思う」という段階ではありませんでした。また、実践 III では、「とてもそう思う」と回答した児童が実践の自己評価が高いことがはっきりと表れています。このことから「よりよい自分」を目指し実践するためには、自分に合った目標の設定が重要であると考えられます。

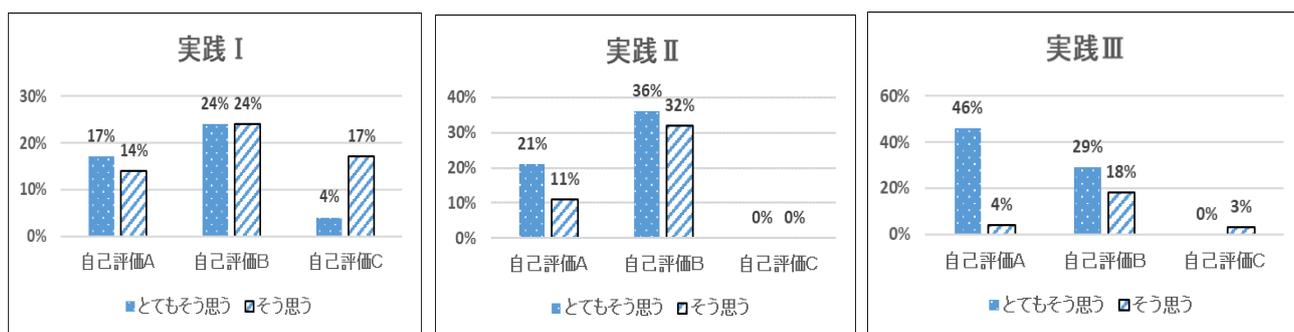


図 3 「自分に合った目標を考えることができたか」についての自己評価

エ 抽出児 B の目標の変容

～検証の視点①「自分に合った自己目標を立てることができたか」から～

抽出児 B は、「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を取り入れた活動に対してやや面倒さを感じており、取組に消極的な面がありました。しかし、学級全体における振り返り活動では、あまり自分に自信がない友達を褒めたり、具体的な事実を挙げながら友達の頑張りをワークシートに書いたりするなど、周囲に目を向ける姿勢においては級友の良い手本となっていました。その点を学級全体で賞賛する場面もありました。その後、実践Ⅲでは、目標設定にも意欲を見せ、表 3 に示すとおり、具体的な目標を掲げて積極的に取り組んでいました。実践Ⅲの後には「バウンダリーワークで（自分に合った目標に）気付けた」と記述しています。このことから、自分に合った目標を持つ際に、「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を取り入れた活動は有効であると考えられます。

表 3 抽出児 B の目標の変容

目標・実践の自己評価	実践Ⅰ	実践Ⅱ	実践Ⅲ
バウンダリーワークの前	集中する	最後まで聞く	止まってあいさつ
バウンダリーワークの後	集中する	最後まで聞く	自分から止まってあいさつ1日3回

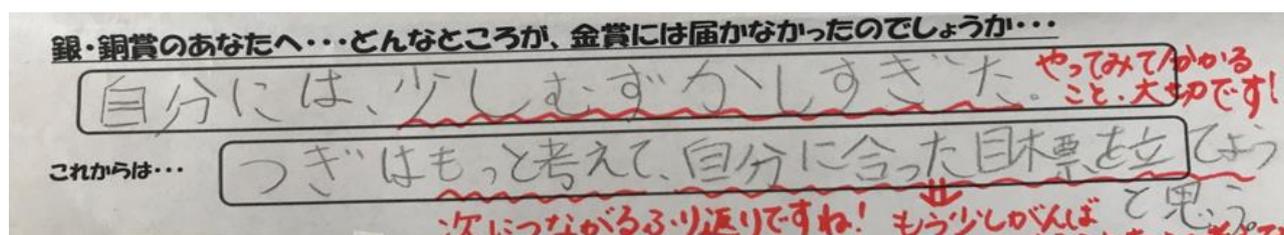
オ 抽出児 A の実践の様子と振り返りの変容

～検証の視点②「目標達成に向けた実践を基に、自己目標の振り返りができたか」から～

抽出児 A は、初めて「バウンダリーワーク（境界線引き）」の考え方を取り入れた活動を行った際は、「今できていること」「もう少しがんばればできること」について考えを書くことにつまずきがあり、やや意欲に欠ける面がありました。しかし、実践を重ねるごとに意欲的に取り組むようになり（表 4）、実践Ⅱの後には、資料 8 のような振り返りを書きました。また、実践Ⅲにおいては、問題点や取組の提案をする調査隊の活動に参加し、学級全体へ「一緒に頑張ろう」と呼び掛ける姿が見られました。

表 4 抽出児 A の自己評価の変容

自己評価の観点	実践Ⅰ	実践Ⅱ	実践Ⅲ
自分に合った目標であったか	そう思う	そう思う	とてもそう思う
実践の様子について	C(もう少し)	B(できた)	A(よくできた)



資料 8 抽出児 A による実践Ⅱの振り返り

(7) 実態調査の結果を基にした手立ての有効性についての考察

授業実践前後の意識の変容について、アンケート調査の結果（次頁図 4）を基に考察しました。「自覚度」は、実践前の 70%から実践Ⅰ後に 87%まで高まり、実践Ⅲの後には 95%まで高まりました。この理由は、大きく分けて 2 つあると考えます。1 つ目は、実践前の段階では、学級目標である「5 の〇 9 か条」を意識して実践できる児童が少なかったこと、2 つ目には、目標を持つことの必要性を感じている児童が少なかったことです。したがって、自分に合った目標を設定し「よりよい自分

を目指し実践する経験をしたことで、学級目標の意識化と「目標を持つことは大事なことである」という認識が高まったのではないかと考えられます。「実践度」は、目標設定に対する児童の実践の実態を表しており、実践前、実践Ⅰ、実践Ⅱ、実践Ⅲの後と、徐々に高まりました。高まりがみられたのは「目標を立てたら、自分で気をつけながらがんばることができる」「学級の目標を達成するために、毎日がんばっている」の項目で、少しずつ自分に合った目標設定と実践がなされていっていることが分かりました。しかし、「自覚度」に比べると、実践度の高まりがやや小さいのは、実践の意義を頭では分かっているが、日々の取組を継続して行うことは、児童にとって容易ではないことを表していると考えられます。「実現度」は、実践前の67%から実践Ⅰ後には87%と、20%も高まりました。実践前の児童は、目標を立てて頑張ることや頑張った達成感を味わう経験がやや少なく、「クラスみんなで頑張っている」という意識をあまり持てずにいたと考えます。しかし、実践Ⅰにおいて、自分に合った目標を立てて頑張ったことで「やってよかった」と思える経験をし、同時に「クラスみんなで頑張っていこう」という気持ちも芽生えてきたことがうかがえました。そして、実践Ⅱでは自分に合った目標設定も2回目となり、実践Ⅰよりも充実した実践が行われ、さらに実践Ⅲでは、自分の目標の実現を実感した児童が増えたことが考えられます。「リレーション度」も実践前の64%から実践Ⅰ後には85%にまで高まりました。実践前は、「自分の目標を決めることに対して友達には関係ない」という意識が大きかったのが、実践Ⅰにおいて目標を決める際に友達に相談したり、実践途中で応援コメントをもらったりしたことで、友達の存在が自分の目標達成を後押ししてくれていることに気付き始めた児童がいることが分かります。また、実践Ⅱ、Ⅲにおいても「リレーション度」が徐々に高まっていることから、実践によって仲間の存在を意識する児童が増えたことがうかがえます。

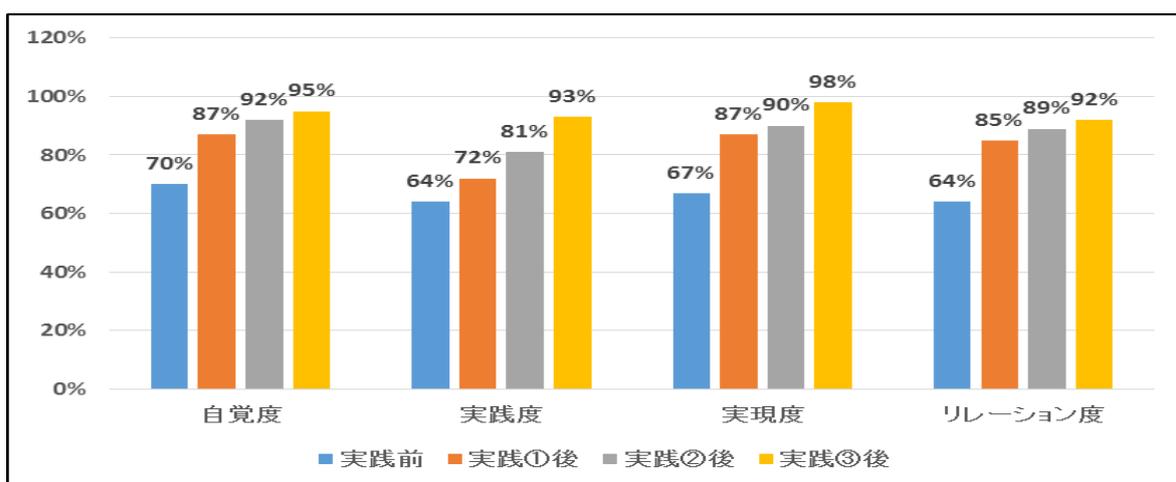


図4 目標についてのアンケート調査の結果

《引用文献》

- (1) (2) ヘンリー・クラウド ジョン・タウンゼント
『境界線（バウンダリーズ）』 平成16年1月 地引網出版社 p.42、
p.337
- (3) 白松 賢 『学級経営の教科書』 平成29年3月 東洋館出版社 p.141、143
- (4) リチャード・H・モア 『目標設定練習帳』 平成18年7月 株式会社イーハトーヴフロンティア p.123
- (5) 安部恭子 「(連載)資質・能力を育む特別活動の指導」『道徳と特別活動』 平成29年10月号 文溪堂 p.45
- (6) 国立教育政策研究所 『楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動小学校編』 平成28年9月 文溪堂 p.13